
ONE PIECE ~ 獣王漫遊記 ~

つくしんぼ山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ONE PIECE〜獣王漫遊記〜

【Nコード】

N7732M

【作者名】

つくしんぼ山

【あらすじ】

少し変わった少年が謎の光に包まれ 気付いたらONE PIECEの世界に転生？なお話。第一話はプロローグ的な感じで三人称？そこから基本主人公視点の一人称形式？です。本作は凄く軽い読物を目指してます。堅苦しいの苦手なもので。主人公はピンチになることはありません。だって最強なもの。尚、いつの間にか内容が変わっていることがあります。編集の鬼っすから。所詮、自己満っすから。それでも良ければどうぞみてやって下さい。

第一話 山と光

「 限界か」

木々生い茂る山奥のそのまた奥。辺りは闇に包まれ、静寂が支配する不気味な雰囲気の中、人の気配は当然、生物の気配すらないそこにポツリと声が落ちる。

「この身では、この世界では、やはり叶わぬか……」

この山でも一際大きな木に身体を預け、声を落とした主は男。それもまだ年若い、あどけなさが残る、歳の頃十六・七といったところの少年である。

なぜ少年がこんな山奥にいるのか定かではないが、その鍛え抜かれた肉体は氣勢を感じさせず、端正な顔は絶望に染まっていた。

「……」

この世の終わりを見たかのようなその表情は、今にも自らの命を断つ選択をしそうである。

「なぜ……」

瞳にちらと決意の火が揺れる。それは少年の最期のを彩る送り火のように。

「なぜ……」

あと僅かで命の灯が。

「なぜ……ッ！」

少年自身の手によって。

「なぜ空を飛べないッ！オロローンオロローン」

号泣。瞳に見えたなんだかよくわらん不審火は、滝のように流れる涙によって無事鎮火されたようだ。

しかし、しかし、なんなのだろう、この行き場のない思いは。初回限りの語り手の身ではあるが、少年とちよっとお話したい気分である。

自分のもやもやに浅からぬ葛藤を抱いていると、少年が嗚咽混じりに言葉を零す。そのなんと説明くさいそれを整理し要約すると

『少年は天涯孤独の身。歳は十六。学校へは行っておらず、特殊なお仕事で食いつなぐ日々。そして、漫画大好き、アニメ大好きな夢見る男の子。しかし夢見るだけじゃイカン。夢は掴みとるものと、日夜、漫画・アニメに出て来る『力（技）』を我が身にと鍛練に励む日々。そして本日もその例に漏れることなく、前々から夢見ていた『舞空術』を今日こそは修得するぞと意気込んで来たが、無駄に時間を消費しただけに終わり、絶望』

こんな感じである。どうやら変わった少年のようだ。残念な方向に全力疾走している。

「あースッキリ。帰ってONE PIECEでも見ようかね」

先程まで浮かべていた絶望はどこへやら。この一連は毎度のことなのか。それともONE PIECEを読むのが余程楽しみなのか。いつの間にか泣き止んでいた少年は、無駄に疲れた体を起こし、歸路に着こうと山を降りる。

「ふんふんふん」

鼻歌を刻みつつ暗く深い木々の間を進み、中腹に差し掛かった頃、突然、耳をつんざく爆音がこだました。

「ッ……なんだ！」

突然の爆音に役に立たなくなった耳に構わず、瞬時に聴覚以外のあらゆる感覚を研ぎ澄ます。

リイイイン

山を撫で上げる不快な異音。それを肌で感じとり、異変の発生源であろう場所を見据える。即ち真上を。

「ッ！」

雲を突き抜け、天を穿った遙か上空。そこに『力』があつた。それは意識を向けなければ気付かないほど臃気なものでありながら、同時に、これ以上はないという絶対の存在感を放つ『力』。

リイイイイン

異音が木々を揺らめかせ、肌に感じる何かも次第に大きくなり

辺りは光に包まれた。

第二話 変態降臨

突然の光に思わず下ろしたまぶたを、段々光が収まっていくのを感じ、ゆつくりと開けると　そこは。

木の壁。木の机。木の扉。目に映るものすべて木尽くしな木の部屋。

つい先程も木に囲まれた場所にいたが何か違う。何がとは言わない。察してくれ。

さてと

「……あーうー（知らない天井だ）」

知らない景色だった。

「ツ！オギヤアアア！（ってなんじゃこりやアアア！）」

突然変わった景色に呆然とし、それでもお決まりの言葉を言おうとしたが、それは叶わず、発した声に驚愕する。

と、そこへ、おれの叫びに反応したのか少女が現れ、おれに身を寄せ、抱き上げる。

びつくりの連続に今まで気付かなかったが、どうやら少女は同じ空間に居たようだ。

「よしよしフレア、泣かないの」

少女はおれをあやすように微笑みかける。

「あーあー（美人さんだー）」

少女の美貌に理解不能な現状もなんのその、幸福な今を楽しもうとばかりにキヤツキヤツと声を上げる。

「うふふ」

喜ぶおれに少女の笑みは更に深くなり、おれの気分は天元突破アアア！

それから暫く、歓喜の声がこだまする。

（ん、しかし……フレアとはなんだ？）

歓喜の天元突破中に浮上した遅すぎる疑問。

（フレア、フレア……FF？）

突然静かになったおれに心配したのか、少女が声をかける。

「どうしたのフレア？」

（どうやらおれを呼んでいるようだが、おかしい。おれにはちゃんと という名前が……あれ？名前なんだっけ？家康じゃなくて、秀吉じゃなくて……信長だったかな？いや違うか。ま、名前なんてどうでもいいか）

用済みの思考を脳から追い出し、ついでに現状把握を行う。

（今さらだが、おれ赤ん坊になつてゐるよなあ。声は赤ちゃん言葉に変換されるし、天井はやけに高く感じるし、何より少女に抱かれているし……やはりあの光が原因か？なんかよくわからんけど凄い『力』感じたし、それしか思い当たる節がない。となると、おれはとうなつたんだ？謎の光を受け、気が付いたら知らない景色に赤ん坊の体。夢を見ているのか、赤ん坊の体にトリップしたのか、はたまた、死んだのか。色々考え得るが、こればかりは考えても無駄か。あの『力』に触れたんだ。何が起きても不思議ではない さて、いまは赤ん坊だ。これが夢でないとすると、転生か憑依を果たしたことになる。しかも母親らしき少女は“美”少女ときたもんだ。よし、夢説却下だッ！なんだかよくわからんがおれは死んだッ！新たな人生を謳歌しようッ！）

だんまりから一転、再び歓喜の声を上げはじめたおれに、少女はホッと笑みを浮かべ、しかし、どこか不安のこもった目を向ける。

（大丈夫かしら、この子）

少女がそんなおれを心配しているとは知らず、喜びのどさくさに紛れ、少女の胸をわしづかむ。

「あらあら、おっぱい欲しいの？」

これぞ、おれクオリティ！赤ん坊という立場を早速利用し、転生早々、母親と思わしき少女の胸を揉み母乳を要求。

他の腑抜けた転生者には出来ない、まさに神の所業ッ！

「たくさん飲んでね、フレア」

少女は着ていた上着をまくし上げ、少女という歳の割には大きな胸をおれの前に差し出す。

（すげー生おっぱいだ！しかも綺麗なピンク色ッ！）

前世で女性と話すことすら余りなかったおれは、美少女の生おっぱいに感激し、その頂きに無我夢中で吸い付く。

「うふふ」

少女にとっては、我が子？に乳を与えるという心とむ行為だろうが、おれにとってはエロ百パーセント。欲望フルスロットルな行為である。

「ちゅーちゅー（あまあまだあ。ドキドキが止まらなあい）

突然降って湧いた転生というボタ餅。乳同様、あまい先行きを感じさせ、気分は上々、ウキウキである。

第三話 鳥と絶叫

ピーヒョロロロロロオオクエックエックエッ

「んう」

いつの間にか眠っていたらしいおれは、不思議な音で目が覚めた。

体に残る陶酔感に眠る前の授乳を思い出し、至福に浸りつつ不思議な音の正体を探ろうと視線を巡らせる。

すると傍らにはおれを抱いて眠る少女が。

あの後、意識が持つ限り乳を吸っていたおれは、この少女が自分の母親で間違いないだろうという結論に至った。

歳はまだ、転生前のおれの三つ、四つ下だろうが そうなると十二・三歳か 雰囲気が母親のそれっぽいし、何より乳が出るということは、妊娠ないし、出産をしていることになる。状況的にみてまあ間違いないだろうし、この少女こそが母親であって欲しいとも思う。美少女だし。

そうなると、この少女の夫となる人物。おれにとつての父親は誰で、何処にいるのかという話になるが、正直どうでもいい。

知らないやつに興味はないし、少女の年齢を考えると、好印象は持てない。

恐らく……いや、止めておこう。外れていたら恥ずかしい。もし、

そうだったら、何処かで生きていたら、その時、殺せばいい。

しかし、見れば見るほど美しい。キメ細かい真白い肌に、発達途上ながら成長を期待させる艶かしい肢体。少々厚い唇は水分を多く含んでいるのか瑞々しく、すつと通った鼻梁とともに、妖艶さより深く際立たせ、またそれとは逆に、肩にかかる桃色の髪はふんわりと波打ち、今は閉じられていて見ることは出来ないが、やや下がつたまなじりから覗く、澄んだ空色の瞳と相俟って柔らかな雰囲気醸し出している。相反する二つの魅力が見事な整合を果たし存在している、正に奇跡を体言したかのような物凄い美少女。転生万歳ッ！

ピーヒョロロロロロオオクエックエックエツ

改めて、おれの母親である（決定）少女の素晴らしさに喜んでいると、そこに割り込む再びの不思議な音。

無粋なそれにイラツとし、前世で「般若も怯えて逃げるぞ、それ」とまで言われた渾身の顔技がんぎを放とうとするが、赤ん坊の表情筋ではちと難易度が高かった。

やる方ない思いを抱えながら、当初の目的通り不思議な音を探ろうと視線を巡らし、ふと窓辺を見ると　　カッパウサギドリ？

近くの木にとまっている不思議な生物。鳥の体躯をベースに、頭に皿をちょこんと乗っけ、その皿の縁から兎のような長い耳を生やしたなんともおかしな……。

ピーヒョロロロロロオオクエックエックエツ

どうやら不思議な音は、この不思議生物が発していた音のようだ。

しかし

「あー（なるほど）」

あんな珍妙な鳥？は、知識にないし、存在するとは思えない。たとえ世界には未だ発見されていない生物がいたとしてもだ。

つまり、ここはおれの知らない世界だぞと。転生だから異世界に決まっただぞと。こんな感じでおれは納得しちゃうんだぞと。口調パクっちゃったぞと。

「ふぁ……フレアお早う」

母親（確定）も目覚め、転生二日目始動。

「あーうーあーあうあう（お早うございます、母上）」

果たして、この世界はいかなる世界なのか。期待高まるおれが知る日は近いッ！といいな。

コンコン

空気を読まず響いた、扉を叩く音。

「はあい。今でま、あら、ガープさん！」

ベッドから下り、扉に駆け寄った、我が麗しの母上が驚きの声をあげる。

（なるほど、来訪者はガープという御仁か。ふむ、ガープ、ガープ……）

「久しぶりじゃな、モア」

粗野な声が響き、しかしその中で、一際異彩を放ち、輝きを帯びる単語が。

（モア？少女の名前か？）

「ガープさん、海軍のお仕事は大丈夫なんですか？」

来訪者の声に応え、返事を返す少女。

（どうやら間違いないらしい。我が母にぴったりな柔らかな名前だ。しかし、ガープ、海軍、ガープ、海軍……）

「なに、ある海賊を捕獲した帰りだな。近くを通ったもんだから寄ってみたんじゃない」

（へー海賊をね。ガープに海軍、海賊ときた。なるほどなるほど）

「オギヤアアアアアア！（いよっしゃあああああああ！）」

赤ん坊の体から出るとは思えないほどに大きな絶叫。

「なんじゃッ!？」

「フレアッ！」

「オギヤアアアア！（しゃああああ！）」

上から、びっくりするガープ。心配し慌てて駆け寄る少女 モア。
叫ぶおれ。

早速知ることになった事実。どうやらおれはONE PIECE
Eの世界に来たらしい！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7732m/>

ONE PIECE ~ 獣王漫遊記 ~

2010年11月2日01時47分発行